

2022. 7. 24. 主日礼拝説教  
聖書： ルカによる福音書4章16～30節  
『誰と共に生きるのか』

先月を以て学び続けてまいりましたマルコ福音書は終え、本日よりルカ福音書を学び始めたいと考えています。

1～3章のクリスマスにちなんだ物語は飛ばして、本来ルカの冒頭であるべき4章から始めて行きます。

紀元60年代半ば以降に描かれたマルコと80年代以降に記されたマタイはユダヤの地という枠組みの中で編集されました。マルコは周辺からエルサレム、つまり中央を臨む視点で書かれ、マタイは反対に中央から周辺を臨む視点で描かれたといえます。

しかし、ルカはユダヤからみればギリシヤ文化という異邦の地にあつて記されました。もちろんルカはマルコとQ資料に影響を受けていますが、マルコとマタイがユダヤの地域的観点という平面に関心を置いたのに対し、ルカはユダヤという地域的枠組みを超えて、ユダヤ人と異邦人、更に人間社会の底辺、つまり差別性を見つめるという垂直の観点を以てマルコやQ資料に再解釈を行っています。

ルカはおそらく90年代初頭にギリシヤ文化圏で執筆・編集されました。その背景となる初代教会の課題は「われわれは誰と共に生きるのか」という問い直し作業が主題となっているのです。そこには累々と横たわる厳しい格差社会と人が人を貶め、卑しめる差別構造がありました。それらをルカは真つ正面から「宣教の課題」として据え直すことを宣言して行くのです。

ルカの基本的思想とは、宣教(ケリュグマ)のイエス理解です。一つ目はイエスとは旧約の成就のことです。18節のイザヤ書61章の引用にあるように旧約約束が神の側から成就したのです。二つ目は、しかし、人も時代も社会もイエスを拒絶したことです。それはイエスが「貧しい人」(経済的という意味ではない)に福音を告げ知らせるためにだけ来られたからです。25節以下では、サレプタの女性(列王上17:9)とシリア人ナアマン(列王下5:1-14)の故事が引き合いに出され、「貧しい人」への福音が絵空事でなく、イエスの謂わば「本気」で

あることを知った郷里の人々は皆憤慨し、イエスを崖から突き落とそうとしたく  
らいです(28-29)。

そして三つ目は、ケリュグマのイエスとは異邦人・貧しい人を含めた究極的・  
普遍的救いであるということなのです。

私たちは「この人による以外に救いはない」と言います。それは、このイエス  
こそ私たちに与えられた唯一の救いであると考えているからです。実は決して  
そうではないのです。その考え方は私たちを差別構造の高見に押し上げるだ  
けのものでしかありません。当時の初代教会はこの問題にぶち当たったので  
す。このままではユダヤ教と同質のまま廃れるしかありません。

ルカが語る「貧しい人」理解とは、「このイエスに出会って、私自身の根底に  
ある問題が示され、それらからの究極的な救いが与えられた。それは私自身  
が貧しい者であることに目覚めさせられた」ということなのです。

そして、そのことは、イエス・キリストの救いの唯一性を外に向かって主張して  
いるのではなく、イエス・キリストに救いの究極性を信じた内なる確信を吐露し  
ているのではないのでしょうか。信仰とは唯一性ではなくて究極性の告白なので  
す。そこから初めて「誰と共に生きるのか」という課題が、イエスの宣教の課題  
として現実化されてゆくのでしょうか。